

# インタビュー実践のフィールドワーク—阿波おどり有名連の女性連長と副連長へのインタビューを素材として—

人間・自然環境研究科 人間環境専攻1年 藤代 滋

## 1. はじめに

このレポートは、盆踊りから日本を代表する祭りに成長した阿波おどりは、なぜ多くの人を惹き付けるのか、その魅力について徳島市の阿波おどりを中心にした実証研究の一環として阿波おどり連<sup>1</sup>のなかの有名連<sup>2</sup>のひとつである「ゑびす連」の女性の連長と副連長を対象に行ったインタビュー調査の結果をまとめたものである。

今回のインタビュー調査は、結果としては不十分なものではあったが、桜井のいう「技法を客観化することを意味したこれまでの信頼性に代わる基準としては、何が考えられるだろうか。すぐに思いつくのは、データ収集から分析にいたる基礎的な過程をあきらかにしていくことだろう」（桜井 2002 : 39）という意味からも、また、実際に行ったインタビューの経験をもとに自らの研究法を身につけていくひとつの方法として、調査対象者の選定、事前の準備、依頼の仕方、場所の選び方、服装などについて具体的な調査過程をあきらかにすることとした。

## 2. インタビュー調査の実践

### 2-1. 調査対象者の選定

阿波おどり連には、阿波おどり振興協会や徳島県阿波踊り協会に所属する有名連、苔作や娯座留のように組織に所属していない有名連<sup>3</sup>、有名タレントなどと一緒におどれる参加型の企業連、会社単位で参加する企業連、学生連、高校のクラブ連、すだち連などの障害者連、あらしわ連<sup>4</sup>などといった国際色豊かな連、観光客が参加できるにわか連<sup>5</sup>、県外連などさまざまな形態がある。今回は、そのなかから1年を通じて活動している有名連と呼ばれる阿波おどり連を調査対象にすることとした。徳島市内には、前記のふたつの協会に所属している有名連が33連ある。多くの連は、男踊り・女踊り・女ハッピー踊り・ちびっ子踊りと鳴り物で構成されている。阿呆連のように男踊りと女踊りと鳴り物で構成されている連や葵連のように女着流し踊りという新しい形を取り入れている連もある。そのなかから女性が連長として活躍している連を取りあげることとした。女性が連長の有名連は、鶴瀬幸子さんが連長をしているゑびす連と武市伶子さんが連長をしているみやび連がある。今回は、ゑびす連の鶴瀬連長にお願いすることとした。（なお、その後、有名連のひとつである新のんき連に池田順子さんという女性連長がいることが

分かった。)

また、理論化のステップとして、第1段階で引き出された仮説に注目し、第2段階では必要なデータを得るため語り手の選択は意識的に行うことになる。方法としては鶴瀬連長にもう一度にインタビューするか、他の多岐す連の連員にインタビューするか、ふたつの方法が考えられる。連長に再度インタビューするのが日程的に難しいこともあり、他の女性連員にインタビューすることにした。そのことを鶴瀬連長に依頼したところ、女性の副連長である野藤みきよさんを紹介してくれた。なお、野藤副連長には日を改めてインタビューを行った。

## 2-2. 事前の準備

### ①質問項目の準備

日本人留学生の調査を行った森俊太は、調査対象者である人事や採用担当者、日本人留学生の就職情報誌編集者、日本人留学生別に5項目から11項目の詳細な質問を準備している。非指示的インタビューで、相手の主観を探る構築主義理論にもとづいた研究であるにもかかわらず詳細な準備をしたことについて森は「かぎられた時間でインタビューをする場合、準備をしすぎることはない」（森 1997: 59）といている。しかし、その結果は「実際にインタビューを始めると、話が準備した項目のようには進まないことがほとんどであり、メモは話のあいまに聞き漏らしがないかをチェックするために使用」（森 1997: 62）したといている。

今回のインタビューにあたっては、14項目の質問を準備したが、実際には、森がいうようにインタビューをはじめるとなかなか思うようにいかず、質問の順番が前後したり、質問が重複したりしている。連長へのインタビューでは、Q6で予定していた女性の男踊りについてどう思っているのかという質問が、Q3の質問に関連して語られたり、Q8の連員の意識の変化についての質問が、Q5の仕事の苦労の後に続いたりしている。また、ちびっ子に関する話題が連の特徴のところとインタビューの終わりのところに出てくる。副連長へのインタビューについても、Q6で予定していた女性の男踊りの質問が、Q3の女性連長への評価についての質問の後に出てきたりする。質問項目をチェックするために準備したメモが活かせず、結果的には、当初、考えていた質問をどうにか最小限こなしているに過ぎない内容になってしまっている。しかし、森がいうようにインタビューの時間がかぎられており、できるだけ準備しておくことが、事後、比較検討するデータになり、つぎのインタビュー実践に活かせるのではないか。

### ②事前調査

佐藤郁哉は事前の準備（下調べ）の重要性を強調し、その事例として劇団への取材をあげている。公演チラシなどからタイトル・日時・会場・観客動員数・チケット料金などの公演の概要、キャスト・スタッフの一覧表、推定売上を基礎資料として準備、また、主宰者へのインタビューにあたっては「誰でもそうでしょうが、過去に何度も同じようなことを聞かれた質問を出されて、それに『百編返し<sup>ひゃっぺんがえ</sup>』のように答えさせられるのは、ウンザリする体験に違いありません」（佐藤 2002：259）ということから、一種の公人である主宰者の過去の発言のおさえ、要約をファイルしておくことや「劇団の主宰者に対するインタビューですから、その劇団の公演を何本か実際に見た上でインタビューするのは、最低限の礼儀です。それぞれの劇団について、最低三本は必ず観ておくようにして、それについての簡単な感想も自分用のメモとして書いておく」（佐藤 2002：259）必要があると述べている。

佐藤のいう劇団の公演を「三本」みるのはともかくも阿波おどり会館では毎日、午後8時から「毎日おどる阿波おどり」<sup>7</sup>が上演されており、有名連が交替で出演している。したがってゑびす連のおどりをみる機会があった。また、ゑびす連のホームページが開設されており、連の紹介をはじめ、連の構成、出演予定、練習スケジュール、連員のためのページ、コラムの投稿欄まである。このホームページをみればゑびす連に関するデータはかなりの部分収集できる。にもかかわらず残念ながら両方ともみていなかった。

阿波おどり本番中の8月12日、阿波おどり会館で行われた「毎日おどる阿波おどり」特別公演にゑびす連が出演したので、その第1回目の公演をみせてもらった。40分の公演は見応えがあった。インタビューのなかで鶴瀬連長が「ゑびすの良さは舞台でご覧になって頂いたら、10分の舞台なんですけど、バラエティに富んでいるんで、ゑびすの舞台は手をたたく暇がない、アーと思ったらつぎがでてきよって」<sup>8</sup>と述べていた。確かに、実際の舞台は、それ以上にすばらしいものであった。躍動感あふれる男踊りはコミカルな演出も取り入れたみせるおどりであり、桜をイメージした女踊りはしなやかで優雅であった。衣装が華やかな女性のハッピー踊りはハッピー踊りならではのさわやかな色気があった、チビっ子の大人顔負けのおどりには驚かされたし、鶴瀬連長のふくよかな体型<sup>9</sup>を活かしたゆっくりとした伝統的なおどりもひと味違って、本当に拍手が鳴りっぱなしであった。午後の公演では「おひねり」が飛んだといわれている。

ゑびす連の公演とホームページを事前にみていれば、同じような質問を繰り返すこともなく、インタビューも違ったものになっていただろう。インタビューは話し手と聞き手の協同作業で成り立っており、聞き手が話し手のことをある程度理解したうえで自由に語ってもらうことが不可欠である。そのためには佐藤のいう入念な「下調べ」が何よりも重要であるといえる。

### 2-3. 依頼の仕方（アポイントメントをとる）

インタビューの依頼方法について佐藤は「手紙の他に電話やファックス、電子メールなどさまざまなやり方がありますが、それとは別に、郵便やファックスなどで、次の二点の文書を送付しておいた方がいいでしょう——インタビューの趣旨や所要時間などについて簡潔にまとめた依頼文（A4の用紙で一枚程度）、具体的な質問内容をまとめたリスト。最終的には電話でアポイントメントをとる場合でも、できれば、さきに郵便などでとりあえず依頼文だけは送っておいてから電話をかけた方が礼儀にかなっていることは言うまでもありません」（佐藤 2002：264）と非常に丁寧な依頼の仕方を紹介している。一方で彼は「施設調査の場合には、施設を管理する機関から許可さえいただければ、聞きとりの対象者は施設側から『あてがって』もらえるわけです」（佐藤 2002：11）と組織がしっかりしているところを対象にした調査と、一方、暴走族の場合は「暴走族グループの、週に一度の『集会』に定期的に参加するようになったのは一九八三（昭和五八）年の八月からでしたが、それまでの三ヶ月間はさまざまな暴走族グループとインタビューの約束をしてはすっぱかされるという体験の繰り返し」（佐藤 2002：11）だったと対象によって対応が異なるといっている。また、日本人留学生の調査を行った森は「断られる率は、文書での依頼の方が、電話での依頼よりも高かった。電話では、初めてであっても、相手の疑問に答えられるし、直接話している場合には心理的に断りにくい。文書であれば、多少でも納得できなかつたり面倒な場合、協力できないとの回答欄にチェックしてはがきを送り返すだけであるので、断りやすい」（森 1997：58）といっている。

森がいうように電話で依頼するよりも文書での依頼する方が断られやすい。確かに佐藤のいうように電話やファックス、電子メールなどで依頼する場合でも簡潔にまとめた依頼文を送付する方法が念がとどいている。しかし、暴走族のようにそれだけでアポイントメントがとれないこともあり、調査対象によって依頼方法が異なってくる。

今回のインタビューイーであるゑびす連の鶴瀬連長への依頼方法は、インタビューアの職場のOBで、ゑびす連が所属している阿波おどり振興協会の役員をしていたN氏を通じて行った。N氏には、インタビュー調査の趣旨をまとめたメモを手渡して、鶴瀬連長への連絡をお願いした。鶴瀬連長へのインタビューのなかでもN氏のことが話題になった。このように相手をよく知っている人を通じて依頼する方法は、ある日、突然に知らない者からインタビューを依頼されるよりは相手に安心感を与え、インタビューがスムーズにいくと考えられる。また、インタビューの依頼も断りにくい。電話や文書による調査依頼にしても調査対象者の社会的地位や人生経験、年齢、調査者の社会的地位、

年齢，調査対象への知識などや話し手と聞き手の関係も影響するだろう。そうしたなかでスムーズなインタビューを行うには，調査対象者に対する事前の調査を行うなど綿密な準備をしたうえで相手の状況に合わせた多様な依頼方法を講じる必要があるといえる。

なお，野藤副連長へは，鶴瀬連長へのインタビュー終了後，鶴瀬連長を通じてお願いした。野藤副連長も当日，阿波おどり会館で行われていた「毎日おどり阿波おどり」に出演していたので連長から野藤副連長を紹介してもらい，直接，お目に掛かって，インタビューの日程を決めさせて頂いた。

#### 2-4. インタビューの場所

インタビューの場所について，森が「インタビューの場所は，会社の人事担当者や就職情報誌の編集者などの場合はその会議室や応接室，留学生の場合は，会社の近くの喫茶店やホテルのロビー，たまに自宅であった」（森 1997：58）というようにさまざまな場所が考えられる。今回の場合は，インタビューイーが阿波おどりの関係者であったことから「阿波おどり会館」の2階にある出演者控室を使わせてもらった。ゑびす連は阿波おどり会館で行われている「毎日おどる阿波おどり」に毎月出演しており，館内の状況もよく分かっているうえに，当日，その時間帯に控室を利用するのは，出演連であるゑびす連の関係者以外には会館の職員もほとんど出入りしないというある意味では隔離された空間であるという恵まれた環境にあった。副連長へのインタビューは金曜日の午前中（平日の午前中は，専属連<sup>10</sup>である「阿波の風」の舞台も行われておらず，館の職員以外の出入りはない）に行った。インタビュー中に控室に入ってきたのは阿波おどり会館の専属連の服部連長だけであった（準備のためか？）が，服部連長とゑびす連の野遠副連長は顔見知りであったこともあり，とくに支障はなかった。このように恵まれたインタビュー場所は少ないと考えられる。インタビュー場所を選ぶ場合，さまざまな選択肢があることから事前にインタビュー場所を調べるなどの準備が必要である。

#### 2-5. 服装

インタビューを行うときの服装について佐藤は「必ず背広とネクタイ（女性の場合にはそれに相当するような服装）のようなフォーマルな服装でのぞむ必要があるというわけでもありません。むしろ，相手によっては，あまりにフォーマルな服装をしているとかた<sup>かた</sup>く<sup>くる</sup>かえって堅<sup>かた</sup>苦<sup>く</sup><sup>11</sup>しい，まさに『面接』のような印象を与えかねません。したがって，服装という点に関しては『これが正解』というのはいにくいのですが，この点に関して判断に迷うような場合は，聞きとりの相手やその所属組織の性格についてよく知って

いる人に聞いてみるのもいいかも知れません。なお、たとえよく知っている相手であっても、あらたまって話を聞かせてもらうような場合には、いつもより少しはフォーマルな服装をした方がいいでしょう」（佐藤 2002：267）といている。しかし、最近は環境問題などで、たとえば、クール・ビズでノータイでラフな格好をしているところもあり、佐藤もいうように必ずしもスーツにネクタイという訳でもない。確かに、相手が初対面の場合など判断に悩む場合も考えられる。相手の年齢、性別、職業、インタビューの内容などによっても異なってくるし、聞き手の年齢や立場によっても異なるだろう。TPOが求められる。迷ったときには、佐藤のいうように事情をよく知っている人に聞くのが適切なのかも知れない。今回は、阿波おどり会館に出演する阿波おどり連の連員のほとんどがラフなスタイル（踊りの衣装で来る連員もいる）で来館していることを知っていたのでジーンズにTシャツというラフなスタイルでインタビューさせてもらった。

## 2-6. インタビュー内容

インタビューは、(i)阿波おどりをはじめたキッカケ、(ii)おどりを辞めたいと思ったことの有無、(iii)おどりを続けていく上での苦労話、(iv)連の構成、(v)連員の意識の変化、(vi)連の特徴、(vii)練習場所や回数、(viii)おどりの変遷、(ix)おどりの魅力などについておこなった。インタビュー時間は、連長へのインタビュー時間が44分、副連長へのインタビュー時間が36分とわずかな時間であったにもかかわらず現場でのインタビュー時間は両方とも1時間以上かかったように感じられた。質問項目の準備のところでも述べたようにインタビューの順番が飛び飛びになったり、同じような質問を繰り返したり、突っ込んで聞くべきところが不十分だったりしたものではあった。

しかし、二人とも長年、阿波おどりを実際におどっており、実際におどっている人の生の話をある程度聞くことができた。とくに研究テーマである阿波おどりの魅力について鶴瀬連長は「私は阿波おどりの魅力は自分が楽しかったらお客さんも楽しい、今の心境というのは、自分が一生懸命おどるのを人に伝える観客に伝える、いつもここ（阿波おどり会館<sup>12)</sup>）で最後にごあいさつをさせて頂くんですけどお客さんが喜んでくれる、私も元気におどれる、おどらしてもらっている。舞台上で元気をもらうんです。私もいいおどりをみて頂く、それが私の使命です、一番の」<sup>13)</sup>と語っている。一方、野藤副連長も「ことばにするのは難しい。それが、なぜだか分からないんですよ。それこそ、やってもやっても究めようとしても、先がみえないというか、これで完璧というのがないんですよ。自分なりにやり遂げた達成感はあるつつも、でもまだまだという気持ちがやっぱりあるので」<sup>14)</sup>という。このように阿波おどりの有名連のひとつであるゑびす連の

トップ二人の阿波おどりに対する考え方が聞けたことで、一定の方向性を得られたように思う。今後、さまざまな連に対して継続して調査を行う手掛かりとなった。

### 3. トランスクリプトの作成

トランスクリプトの作成について桜井厚は「なによりも書きおこし作業は、時空間を異にする場所でインタビューの場を反省的に振り返る貴重な過程でもあるからだ。発見も解釈のアイディアも、この作業の途中で生じることが多い。その点からもトランスクリプト作成は、あくまでも聞き手である調査者がおこなうのが原則」（桜井 2005 : 131）であり、「トランスクリプト作成の大原則は、できるだけ調査者自身が書きおこしをすることと、語り手と聞き手をふくむ全過程を逐語おこしすることである」（桜井 2005 : 133）と調査者自らが書きおこす必要性を強調している。また、「ライフストーリー・インタビューは、状況次第だが一般的には一回につき九〇分から一二〇分におよぶ。それを逐語おこしで文字テキストに変換するのは、ほとんど苦役に等しいと嘆く人がいるほど長時間におよぶ作業だ。インタビューの密度やトランスクリプト・ルールなどによっても異なるが、トランスクリプターを使ってパソコン入力するには、慣れた人でも一時間のインタビューに四時間から六時間を要することを『覚悟』しなければならない。ところが、この『苦役』がさまざまな解釈を生み出す知識の『宝庫』であり、語り手でなく『自己』の発見にもつながる過程であることに気づくには、それほど時間はかからない。何回かの経験で十分だろう。この過程がエキサイティングな珠玉の時間なのである」（桜井 2005 : 132）という。

今回、トランスクリプトにあたっては逐語おこしで書きおこしたが、実際のその場の雰囲気とか臨場感とか微妙なニュアンスとかを上手く文字化し、読み手に、正確に伝えることが非常に難しいと感じた。それにトランスクリプトの作成には慣れていないこともあって桜井がいう以上に思わぬ時間がかかった。経験不足で不慣れな場合、スムーズなトランスクリプトの作成を行うためには桜井がいうように解釈を生み出すエキサイティングな珠玉の時間と捉えるのではなくむしろ解釈をまじえず機械的に正確に逐語おこした方がよいのではないかと感じた。

### 4. まとめ

インタビュー調査は、聞き手と話し手の協同作業であるといわれるが、聞き手と話し手の関係はそれぞれの年齢や性別、社会的地位などによって非対称になることが考えられる。佐藤は大学院生のとき、北山刑務所で父親と同じくらいの年齢の人に「先生」と呼ばれ、かなり心理的に負担になったという（佐藤 2002 : 9）。また、桜井は「インタビ

ューアーは専門家であって社会的地位も高い場合が多い。(略) インタビューアーの権力が強い場合、語り手はインタビューアーの聞きたいストーリーを語る傾向があるといわれる。それに『わざわざ遠くから来た大学の先生に手みやげでももたさないと』といった、語り手の心遣いもある」(桜井 2002 : 258) という。今回のインタビューアーの二人とは初対面だったが、依頼の仕方と言及したように、依頼する段階である程度のお互いの情報が伝わっていること。テーマの「阿波おどり」については、聞き手にもある程度が知識があり、かなり共通した話題もあったこと。職業的にも共通性があったこと。また、年齢的にもそう大きな開きがないなど、比較的対称的であったので、インタビューそのものはやりやすかった。

しかし、「下調べ」がかなり不足していたこともあり、トランスクリプトをみれば、ポイントに気付かず肝心なところで突っ込んだ質問ができないなどインフォーマル・インタビューの特徴である臨機応変に質問ができないなど反省点も多い。また、録音器具の操作に慣れていないなど技術的な問題も生じた。インタビュー調査を実際に行う場合には、依頼の仕方、機材の準備、柔軟かつ多様な展開を想定した質問内容の検討など周到かつ入念な事前の準備が必要であること。さらにかなり技術的な熟練も必要なことがわかった。

桜井は「調査者の個性に応じてそれぞれのインタビューの手法があり、それにもなる解釈の仕方があるとするならば、それぞれのライフストーリー・インタビュー経験をもとに自らの研究法を身につけていくことこそが望ましい」(桜井 2005 : 8) という。

また、ジェラルド・サトルズは「何にもまして、フィールドワークというのは<sup>わざ</sup>技芸 (craft) <sup>15</sup>なのであり、本を読むだけで学べるようなものではないということを肝に銘じておく必要がある。ブロック積みのようなものである。コツをつかむためにはまず自分の手でやってみなければならない。試行錯誤もあれば、練習の必要もあり、徒弟修業の期間もある。この<sup>わざ</sup>技芸<sup>16</sup>の多くの部分は口伝や模倣を通して教えられるものである。いまだ明らかになっていない側面もある。実際にやってみる前に、フィールドワークに関して書かれた本を読むのに余り時間を費やさないことである。第一、フィールドワーク調査が好きになれないかもしれないし、もともと調査には向いてないのかもしれないのだ。誰もがブロック工にはなれる訳ではないように」(Suttles 1984=2000 : 44-45) といっている。佐藤も「フィールドワークは、テクニクというよりは『技(わざ)<sup>17</sup>』としての性格が強い。一種の**見習い修行**<sup>18</sup>は不可欠のプロセスである」(佐藤 1992 : 8-9) といっている。

確かにサトルズがいうようにフィールドにでて、実際にフィールドワーク調査を行ってみるとフィールドワーク調査に向いていないかもしれない。フィールドワーク調査に



限らず人には向き不向きがあるだろう。しかし、対象となる事例によっても向き不向きが変わってくることも考えられるし、インフォーマントとの関係（相性）によっても異なるだろう。また、調査領域に対する調査者の興味関心、理解度、知識量などによっても状況は変わってくるだろう。したがって、インタビュー調査は何にもまして、実際にやってみること、実際にフィールドにでて経験を積み重ねることである。それは佐藤がいうように「一種の見習い修行」を積み重ね「技」を磨くことであり、経験を積み重ねるなかで自分にあった調査方法を探すことです。そうすることによって桜井がいう「先行研究の経験に学びながら、なによりも『自分なりの研究法』を確立していく」（桜井 2005：7）ことができるのではないだろうか。

## 【注】

### 1 阿波おどり連

阿波おどりをおどるグループのことを連（れん）と呼ぶ。本文、調査対象者の選定のところで言及したように有名連や企業連、学生連などさまざまな形態がある。自由に創れるため連の総数は1,000以上あるといわれている。

### 2 有名連

有名連といわれるのは、長年にわたって踊りを続けている技術的に洗練された集団で「阿波おどり振興協会」「徳島県阿波踊り協会」に属している連をさす場合が多い（阿波おどり会館のパンフレットなど）。なお、おどりの団体は他に「徳島県阿波おどり保存協会」がある。また、苔作や娯座留などのように団体に所属していないが有名な連もある。

### 3 組織に属さない有名連

打楽器のみでビートの効いたリズムとテンポの速いおどりの個性派集団、苔作（1968年結成）やおどりの名手といわれる四宮生重郎さんが1989年に創立した女性のハッピー踊りが中心の娯座留などは協会に所属していないが人気がある。

### 4 あらそわ連

徳島県国際交流協会が中心となって国際交流員やAET（英語指導助手）などが参加する国際色豊かな連。連の名前は「争そわないように」という願いを込めて名付けられたといわれている。

### 5 にわか連

1977年から行われている本場の阿波おどりを体験したい人が飛び入りで参加できる連。阿波おどり本番の8月12日～15日の4日間、18:30、20:30の2回実施される。有名連の手ほどきうけ演舞場でおどれるため人気があり、毎回、多くの参加者がある。

6 ルビ，原文.

7 毎日おどる阿波おどり

毎日おどる阿波おどりは大阪万国博覧会が行われた 1970（昭和 45）年に観光客向けにはじめたみせるための阿波おどりで，現在は阿波おどり会館で毎日午後 8 時から有名連が出演して行われている。

8 2006 年 6 月 30 日（金）に行った鶴瀬連長へのインタビューによる.

9 ふくよかな体型は，ゑびす連のホームページの連長の自己紹介から引用.

10 専属連

阿波おどり会館のオープン時に結成された阿波おどり会館の専属連で，連の名前を「阿波の風」という。平日は 1 日 3 回（14:00~15:00~ 16:00~），土・日・祝日は 1 日 4 回（11:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~ ）定期上演している。

11 ルビ，原文.

12 （）内の注，筆者.

13 2006 年 6 月 30 日（金）に行った鶴瀬連長へのインタビューによる.

14 2006 年 7 月 7 日（金）に行った野藤副連長へのインタビューによる.

15 ルビ・（）内の英語，原文.

16 ルビ，原文.

17 （）内，原文.

18 強調，原文.

#### 【引用文献】

森俊太，1997，「インタビュー調査とリアリティ構成—日本人留学生の社会構築」北澤毅・古賀正義編『〈社会〉を読み解く技法』福村出版.

桜井厚，2002，『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

———，2005，『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房.

佐藤郁哉，1992，『フィールドワーク—書を持って街に出よう』新曜社.

———，2002，『フィールドワークの技法—問いを育てる，仮説をきたえる』新曜社.

Suttles Gerald，1984，*Some Rules of Thumb for Doing Fieldwork*, Unpublished Teaching Material. (=2000, 佐藤郁哉訳「フィールドワークの手引き」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房.)

ゑびす連ホームページ (<http://www1.quolia.com/ebisuren.tokushima/>)